冷泉家時雨亭文庫蔵『難後拾遺』考

殿本佳美

一、『難後拾遺』成立の背景

『難後拾遺』（難後拾遺抄とも）は第四番目の勅撰集である『後拾遺集』（白河天皇下命・藤原通俊撰）に収載された八十四首（一首は『拾遺集』の歌）について難じた歌学書であり、作者は源経信またはその子であり第五番目の勅撰集『金葉集』の撰者である源俊頼とされている。

藤原通俊が『後拾遺集』を撰した際の事情については先行研究を少し長く引用する。藤原清輔の『袋草紙』[1]（上巻　故撰集子細）には「通俊卿一人撰レ之。如レ序承保之比奉レ之、応徳三年九月十六日奏レ之。」とみえるが、これについて上野理氏は『後拾遺集前後』[2]で「承保二年（一〇七五）九月に天皇と通俊は勅撰集の編纂を考えたが、その仕事にとりかかるのは、九年後の応徳元年（一〇八四）六月、完成は応徳三年九月である。通俊は仕事のおくれを多忙故とするが、勅撰集の編集を大切にすれば本務のやりくりをし、他の近臣にてつだってもらうこともできたかもしれない。承保二年に通俊二九歳、天皇二三歳で近臣もみな若く、歌人としての自信ももってはいない。いま選定したならば、白河朝の歌人の歌は一首も拾えず、彼らが反撥し、それゆえに歌会をひらき、勅撰集を編纂しようとする、摂関政治最盛期の歌人の歌のみを収めねばならない。天皇や通俊に、すぐに勅撰集を作る気持ちはなかったはずだ。」と述べる。また平田喜信氏は新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』の解説で「後三条・白河両朝におけるいわゆる天皇親裁を目指しての政治動向は、実は、外戚の地位を離れた摂関家の衰微ともあいまって、天皇と天皇をとりまく新勢力による政治権力の確立を目論

んだものであったとも言えよう。（中略）白河朝における歌界のありかたもまた、こうした政治状況と分かちがたく結び付いていた。この時期、和歌への関心は急速に高まりを見せ、天皇を中心にした歌会、歌合の度数はいちじるしく増大するが、そこに参加した者の多くは職事弁官を経験した侍臣や有力な受領たちなど、親政を推し進める際に積極的な役割を果たした人々であった。これに比して、摂関家主催の歌会などは次第に影をひそめ、歌合行事の企ても間遠になっていく。官界における新しい力関係は、ようやく文芸の世界にも浸透しようとしていたのである。『後拾遺集』の編纂が企図され、撰者として通俊に白羽の矢が立てられたのは、まさにこのような状況の下であった。」と述べている。このように『後拾遺集』撰者の選定には摂関政治の衰退という時代背景が深く関わっていたのである。

後世、清輔は『袋草紙』（上巻　撰二萬葉集一或称二大同朝一疑二桓武時一事）で「于レ時有二経信匡房者一。此道之英才、先達也。不レ奉レ之、如何。但或人云、私撰之後、取二御気色一云々。于レ時有二難後拾遺云物一。世以称二経信之所為一。通俊見レ之云々。」と、経信や匡房のような優れた才を持つ者を『後拾遺集』の撰者としなかったことに疑問を呈しており、もとは通俊の私撰集であったとする「或人」の言も載せている。この「或人」の言について久曾神昇氏は『歌学大系』「難後拾遺」[3]の解題で「誤とすべきであらう。」とする。「当時通俊よりも適当と思はれる源経信、大江匡房などがゐた為に生じた説にすぎないであらう。匡房は特に漢学者であるので暫く別とするも、経信はやはり無視することはできない。従って奏覧に先立って、経信の校閲を受けたのである。その時に経信が「神妙之由」を述べたので、通俊は、その言を信じて奏覧したのであらう。経信は快く思はなかったので、形のごとく「神妙之由」は申しておきながら、早速非難を始めたやうである。いはゆる後拾遺問答である。」という。『後拾遺問答』は現在散佚しているが、『袋草紙』（下巻　故人和歌難）に「後拾遺問答云、問者、経信卿　答者、通俊卿」として六首について問答があり、また『袖中抄』（第四　わかくさのつま）にも「後拾遺問答云、（中略）経信卿問云、（中略）通俊卿答云」などとみえる。久曾神氏は『袋草紙』に引用された六首のうち「二首は現存後拾遺抄には見えない。奏覧の後に多少改めた為であらうか。（中略）難後拾遺抄はその後に成ったのである。」という。

二、『難後拾遺』の作者

清輔は『袋草紙』（上巻　雑談）で『後拾遺集』について次のように述べている。

後拾遺末代規模集也。雖レ然彼時有二種々誹謗一云々。

「末代規模集」とは芦田耕一氏[4]によれば、「後拾遺集（一〇八六年成立）は「末代」において手本、規範である勅撰集であるというのだが、（中略）当代は末代であるので後拾遺集が規範になる」のだが、とはいえ当時はさまざまな誹謗があったのだという。その後に経信の孫であり俊頼の子である俊恵が清輔に語ったとして次のように述べる。

又難後拾遺と云物有。世以称二経信卿之所為一。而近年俊頼朝臣子息僧俊恵相語云、吾妹女房逝去之後、彼遺物ヲ開見之処、故頭遺草少々。其中有二件難後拾遺之草案一。故頭之手跡也。若彼所為歟云々。予案レ之若以二帥口状一執筆間草歟。

この部分について久曾神氏は「経信はすでに七十余歳の高齢であり、俊頼は明確にしがたいが、三十歳前後であつたやうに思はれ、口授を執筆したとしても不自然ではないやうである。殊に本書の序に「人によませて聞つれば」とあるは、それを裏書するやうに思はれる。従つて清輔の推定を認めるべきであらう。」といい、作者経信説をとっている。上野氏も「『難後拾遺』の著者を経信とすることに、従来、まったく疑問がなかったわけではないが、内容をみれば、経信以外に著者を考えることはむずかしい。」とされる。久曾神氏と上野氏が根拠の一つとするのが巻三（一七八）「わがやどの」歌についての記述である。以下引用本文は『歌学大系』によった。（　）は続群書類従本を以て誤脱を補訂したもの。

（つくし大山寺といふ所にて歌合し侍けるによめる）
元慶法師

わがやどのかきねなすぎそほと、ぎすいづれのさともおなじうの花

此歌は、つくしにはべりしほど良暹といふそうの、わがよみたるとなんいふとき、て、これはふる歌とぞきくとか侍しは、七十のほうしのわが、みによめりしかば、そらごと、はおぼえずとまうししを、元慶法師とかきつけられて侍しを、この集えらばれたる人にとひはべりしかば、実源法師がつくしにありけるほど、元慶というふもの、まさしうよみたりし

を見しなりとまうせば、そのよしをかきたるなりとあるを、実源がつくしにありけることは、資通大弐のつかひなり。良暹がわが歌とまうししことは、そのさきのことなり。良暹がふる歌をわがといひけるにやあらん。元慶が歌といふことはそらごとなり。もし元慶法師が良暹が歌かきていだしたりけるにやありけん。いづれにてもありぬべきことなれど、空ごとなりとおもうたまふればかきつくる也。

『難後拾遺』の作者が筑紫にいたころ、良暹が「わがやどの」歌を自分が詠んだものだといい、それについて「この集えらばれたる人」に問うたという出来事について上野氏は「まず、『後拾遺問答』の経信を考えるべきだ。」といい、ほかにも赤染衛門が詠んだ（一九三）「なかぬよも」歌について書かれた「この歌合は、右方にてはべりしかば、そのほどのことはくはしうきゝたまへしなり。」という立場にあって、『難後拾遺』成立時、「多くは没し、当時活動をつづけるのは、七二歳の民部卿経信一人であろう。」と断じている。

一方、関根慶子氏は『難後拾遺集成』[5]のはしがきで「『難後拾遺』は、『袋草紙』以後『古来風體抄』・『八雲御抄』等にも『源経信』の述作として信ぜられ今日にいたっている。今日も著者を経信とするに異論は殆ど出ていないが、いま一度検討してみる必要はあろうと筆者は考えている。」と述べている。

三、『難後拾遺』の伝本

『難後拾遺』の伝本は多くなく、翻刻されたものとしては歌学大系本、続群書類従所収本、八代集全註所収本[6]の他、『難後拾遺集成』に竜氏旧蔵契沖本、神宮文庫本があり、契沖本等との相違が少ない清水浜臣校本（静嘉堂文庫蔵）は校異や書き入れが記されている。それらの伝本を整理されたものをお借りし、簡略化すると次のようになる。

一、神宮文庫本

一、諸他本

○貞和等奥書本（静嘉堂文庫清水浜臣本・彰考館本・八代集全註所収本など）

○契沖本（竜氏旧蔵契沖本・東大総合図書館片野氏旧蔵本など）

○その他（歌学大系本・続群書類従本など）

関根氏は神宮文庫本を「諸本のうち独り特異な系統の本文を有する」とし、「目下のところ大きく二系統となり、諸他本は

大体三群に分けておくのが便宜かと思われる。」とする。またその書写年代を近世とし、他本もすべて近世の書写である。

四、冷泉家時雨亭文庫蔵『難後拾遺』

さて、平成十年（一九九八）に冷泉家時雨亭叢書より『後拾遺和歌集　難後拾遺』[7]が刊行された。後藤祥子氏による『難後拾遺』の解題に「十四世紀を下らない書写のように思われる。（中略）近世をさかのぼることのなかった『難後拾遺』の伝本にはじめて中世の書写本の出現をみたことになる。」とあるように、大変貴重な写本である。書誌は「縦二一・一センチ、横一四・一センチの楮紙綴葉装、表紙共紙の略装で外題「難後拾遺」も打ち付け書き。（中略）一オより漢字片仮名混じり文で、一面十一～十二行詰めに書き、（中略）識語奥書の類はない。」とある。

本文系統については同じく解題で「相互に微細異同が錯綜して容易に立て難いが、歌序や文章の流れに大きな違いは見られないものの、該本は（中略）現在までに知られてきたどの本とも共通するものを見ない」として誤脱と特異本文の例をいくつか挙げておられる。また関根氏も『難後拾遺集成』で「強いて系統を立てる必要もあるまい」という。

しかしながら特異本文と思われるものにもいくつか他本と共通する部分がみられるので次に挙げ、その際、後藤氏に倣って微細な異同は省いた。以下、本文の引用は冷泉家時雨亭叢書『難後拾遺』（以下　冷）による。濁点や句読点は主に歌学大系の翻刻を参考に私に加えた。異同を挙げた四本の記号は神宮文庫本（神）、八代集全註所収本（八）、竜氏旧蔵契沖本（竜）、歌学大系本（歌）とした。用例冒頭（　）の漢数字は『後拾遺集』の番号。

（四一）

春なにはといふところにて
はる〳〵とやへのしほぢにおをくあみをたなびくものはかすみなりけり

このうたはをかしうよみたるをあるもの、いひしは貫之が哥にかはらぬ。いかでえらびいでられたるにかあらむとてその哥とはきたまへざりしはもし
まかせたればはるのつなでをのづからかすみたなびくものにやはあらぬ[①]
と集にか、れたるにやあらむ。それにてはこの哥はかすみたなびくといふことをふしにてあるをとりたれば[②]

難はいはれたれとかばかりにたるはさのみこそあれ。[4]
（以下貫之・花山院等六首を引用するが略）

①　はるのつなでは
（神）はるのつなては
（八）春のつなでは
（竜）よるの霞は
（歌）春の霞は

②　集にかゝれたる
（神）集にかゝれたる
（八）集にかゝれたる
（竜）集にかゝれたる
（歌）集にいれたる

③　ふしにてあるをとりたれば
（神）ふしにてあるをとりたれは
（八）ふしにてあるをとりたれば
（竜）ふしんにてあるをとめたれば（不審（朱））
（歌）本にてあるをとりたれば

④　難はいはれたれとかばかりにたるは
（神）難はいはれたれとかはかりにたるは
（八）なし
（竜）なし
（歌）なし

（四七）

屏風の會にとりおほくむれゐたるところをたびゝと眺[5]望するを　　長能

かりにこばゆきてもみましかたをかのあしたのはらにきゞすなくなり

もしゆきどころにやありけん。たゞこの哥題にとりおほくむれゐたりとかきたるは[6]、水鳥などにやありけむ。さらばきゞすとよまれたるはいかゞあらん。鳥などはいづれもをなじことか。花鳥と詩題にあるはうぐひ[7]すのはなとおもひならはしたるを

丞相の御時

詩に鳥のかたにつるをつくられたることもあり　又か

りてもゆきてぞみましとあるめれば、みむにはいかなるとりにてもとかともあるまじきにやはさるべしともおぼへぬなり。またくたびゞとをよみて□りのことをよまぬにやあらむ。おぼつかなし。

⑤ たびゝと眺望するを
（神）旅人眺望したるを
（八）人〻〳〵眺望したるところを
（竜）人々眺望したるところを
（歌）人々眺望したるところを

⑥ かきたるは
（神）書たるは
（八）書たるは
（竜）かきたるは
（歌）かきたるを

⑦ 花鳥と詩題にあるはうぐひすのはなと
（神）花鳥と詩題にあるは鶯と花と
（八）花鳥と詩題にあるは鶯と花と
（竜）花鳥も詩題にあるはうくひすとはなと
（歌）花鳥の詩題にあるは、鶯とはなと

⑧ とかともあるまじきにやはさるべしとも
（神）鳥かと見ましにやはあらんたかゝりをそへたれとつゝきのさるへしとも
（八）とりかと見るまじきにやはあらん、たかゞりをそへたれど、つゞきのさるべしとも
（竜）とりかと見るまじきにやはあらんたかゝりをそへたれとつゝきのさるへしとも
（歌）とりかと見るまじきにやはあらん。たかゞりをそへたれど、つゞきのさるべしとも

⑨ また〳〵たびゞとをよみて□りのことをよまぬにやあらむ
（神）只旅人をよみて鳥の事をよまぬにもやあらむ
（八）又、たゞひとことを読みて、とりのことをよまぬにもやあらん
（竜）またゝひとことをよみてたひの事をよまぬことやあらん
（歌）またたぐひと其をよみて、とりのことをよまぬにもやあらん

（八六）

後冷泉院御時上のをのこども花みにまかりて哥[10]などよみて一宮のおほむかたにまゐりたりけるに

一宮のするが

おもひやるこゝろばかりはやまざくら[11]たづぬるひとにをくれやはする

哥の心はいはれたれど、人にをくるといふことはまが[12]〳〵しきことゝおもひならはしたるはいとはれにいださむ哥にはいかゞはあるべからむ

⑩　哥などよみて一宮のおほむかたに

（神）哥などよみて高倉一宮の御方に

（八）高倉の一宮に

（竜）高倉の一宮に

（歌）高倉の一宮に

⑪　やまざくら

（神）桜花

（八）櫻花

（竜）さくらはな

（歌）さくら花

⑫　まが〳〵しきこと、

（神）まか〳〵しき事と

（八）いま〳〵しきことと

（竜）いま〳〵しきこと、

（歌）いま〳〵しきとこそ

（一七八）

つくし[13]の大山寺といふところにて哥合しはべりけるによめる

元慶法師

わがやどのかきねなすぎそほとゝぎすいづれのさともおなじうのはな

このうたつくしにはべりしほどに良暹といふ僧のわかよみたるときゝてこれはふる哥とこそきけといひはべりしかば七十の法師のわかゝみによめりしかばふるう[14]たとまうさんに、そらごとゝとはおぼえずとまうしゝを、元慶法師とかきつけられてはべりしを、この集え

らばれたるひとにとひはべりしかば、実源律師がつくしにありけるほど、元慶といふもの、まさしくよみたりしをみしなりとまうせば、そのよしをかきつけたるなりとあるを、実源がつくしにありけることは資通ふるうたをわがうたといふことはそらごとなり。もし元慶が良暹がうたかきていだしたりけれるにもやあらむ。[15]いづれにてもいづれにてもありぬべけれど、そらごとなりとおもうたまふればかきつくるなり。

⑬ つくしの大山寺といふところにて哥合しはべりけるによめる

（神）（八）（竜）（歌）なし

⑭ ふるうたとまうさんに

（神）ふる哥と申さんに

（八）古歌と申さんに、ふる歌

（竜）なし

（歌）なし

⑮ いづれにてもいづれにてもありぬべけれど

（神）いつれにても有ぬへき事なれと

（八）何れにてもありぬべきことなれど

（竜）いつれにてもありぬへきことなれと

（歌）いづれにてもありぬべきことなれど

（四一）「はるゞゝと」歌の①と③は（神）（八）に一致し、②は（歌）のみが異なっている。④は（神）と一致し、他本に見えない。

（四七）「かりにこば」歌には異同が比較的多く、⑤の詞書「旅人」は（神）に一致する。⑥は（歌）の誤りと見てよい。⑦は細かな異同がどれとも一致しないが、意味としては（神）（八）が正しく、（冷）はそれに近い。⑧の「あるまじき」は他本では「見るまじき」「見まし」となっており、また（冷）には大幅な脱落があるように思えるが、（竜）の「とりかと」の部分に「不審」の書き入れがあるように、脱落部分を他本で補ったとしても文意はつかめないままである。⑨は（神）にほぼ一致する。

（八六）「おもひやる」歌の⑩と⑫は（神）にほぼ一致しているが、⑪は（冷）の特異本文である。

（一七八）「わがやどの」歌は（冷）以外⑬の詞書を欠くが、『難

後拾遺集成』に校異があがる清水浜臣本には『後拾遺集』から詞書を補った旨の書き入れがあり、（冷）も同様と考えるべきであろうか。⑭は（神）（八）にほぼ一致する。⑮は（冷）の誤写であろうが、他の箇所で（竜）「そらこと、はそらこと、はおほえす」や（八）「古歌と申さんに、ふる歌」などが見えるように、目移りによるくり返しと思われる誤りが多い。

以上少ない例ではあるが、①③⑭などを見ると冷泉家本は神宮文庫本に加えて八代集全註所収本（貞和等奥書本）にも近いと言えるが、④⑤⑨⑩⑫などからはより神宮文庫本の本文に近いと言えよう。とくに④⑩⑫の神宮文庫本との一致は、他本との差異が明確である。

五、まとめ

これまで近世の写本しか伝わっていなかった『難後拾遺』に、新たに中世の写本である冷泉家本が加わったことは大いに意義がある。本稿では先行研究を踏まえて『難後拾遺』の成立や作者の問題にふれ、わずかながら冷泉家本を翻刻し、『後拾遺集』（一七八）「わがやどの」歌は二、（『難後拾遺』の作者）にあげた歌学大系本とも比較できるように全文をあげた。そのわずかな例から他本との校異を見てきた結果、冷泉家本は比較的神宮文庫本に近い本文であると言えそうである。詳細な本文研究は次回以降の課題として、ひとまず稿を終えたいと思う。

注

（1）『日本歌学大系　第二巻』（昭和三十一年　風間書房）
（2）上野理『後拾遺集前後』（昭和五十一年　笠間書院）
（3）『日本歌学大系　別巻一』（昭和三十四年　風間書房）
（4）芦田耕一「『袋草紙』における「末代」―著述意図と関連させて―」（中古文学三十号　昭和五十七年　中古文学会）
（5）関根慶子『難後拾遺集成』（昭和五十年　風間書房）
（6）『八代集全註』（第一巻）（昭和三十五年　有精堂出版）
（7）冷泉家時雨亭叢書　第四巻『後拾遺和歌集　難後拾遺』（平成十年　朝日新聞社）

（とのもと　よしみ／清文堂出版株式会社）